

内村鑑三の「十字架教」

道家弘一郎

the funeral ceremony should have been held on a much larger scale in the center of the city, as he was a person of worldwide renown.

Uchimura, who opposed the category of "work" and "success" to that of "the Cross" and "failure," must have thanked Nitobe for his favor with a smile, and appreciated his disciples' sincerity in joyful trust.

Jūjikakyō (十字架教): the Crucifixianity of Kanzo Uchimura

Kanzo Uchimura coined a new word, "Jūjikakyō," and put it into a new English word, "Crucifixianity," in order to emphasize the essence of Christianity. It exists not in our being crucified like Christ, but in Christ being crucified for us. The Cross is the cornerstone of the whole structure of Christianity.

Uchimura used this word for the first time in 1915, in a letter to Keizo Morimoto in Sakushū (作州), advising him to believe in Evangelical Christianity as sincerely as Honen, a great Buddhist born there, who believed in the Absolute Power that wishes to save mankind.

From 1920 on, Uchimura repeated, "Christianity is Crucifixianity," telling us that sins were forgiven and annihilated on the Cross, with blessings promised and bestowed on the condition of believing acceptance in what happened on the Cross. From this standpoint, he continued his famous Otemachi lectures on the *Epistle to the Romans*, and published *A Study of the Epistle to the Romans*, unanimously acknowledged as his most important work of theology. He contrasted the "old" orthodox faith with the "new" theology, the name given by Japanese Christians in the Meiji Era to liberal theology imported from 19th century Germany.

On the other hand, Uchimura thought the Cross to be a symbol of failure, and that Jesus Christ was a man of "failure." "Fifty years since my being baptized" (1928) says that Uchimura was forced to renounce social success and prestige, but that he thanked God who used him as an instrument to save the little ones. His memorial address to his old friend Tokio Yokoi reveals his heartfelt sympathy for Yokoi, when he bitterly opposed a critic who said Yokoi had failed three times in his life as a scholar, a priest, and a statesman. Uchimura argued that these failures would never have happened if Yokoi had not maintained his faith, patriotism, and Christian honesty.

Uchimura also points out the proper way to enter Christianity. Some people seek comfort for their troubles and misfortunes, others wish to attain knowledge of Christianity as something that provides a kind of Weltanschauung, and people of a third kind want to work for social service. None of them can reach the central depth of Christianity, which can be comprehended only by those who wish to have atonement for their sins on the Cross.

After the funeral ceremony of Uchimura, held at his house in a suburb, Dr. Inazo Nitobe, his old friend, complained that his near disciples too much emphasized the Cross, ignoring the triumphant side of Uchimura, and that

「十字架教」、それを英語に移して 'Crucifixianity'——これらはいずれも内村鑑三が鑄造した新造語である。両方とも辞書には存在しない。内村がわざわざこういう言葉を作りだしてまで強調したかったのは、十字架によるキリストの贖罪にこそキリスト教の福音がある、と信じたからである。

内村は娘ルツの死によって「復活」を、第一次世界大戦によって「再臨」を把え直したように、その時々が必要に強制されてキリスト教の教義の真の意味を体得してゆく。これが彼のいわゆる「実験」である。だからこの実験の坩堝から析出してくる信仰は、そのとき初めて開眼したかのごとき新鮮さと迫力をもって強調された。十字架によるキリストの「贖罪」、「十字架教」の唱道も、また同じであった。

この言葉が初めて見られる箇所は、一九一五(大正四)年八月一〇日、津山の森本慶三に宛てた書簡である。そこには「法然房を以て福音的仏教を産出せし作州の地が福音的基督教の根柢の地たらんことを祈り候、道徳教や社会教は役に立ち不申、十字架教のみ我等の信仰に有之べく候」とある。これより前、八月五日のベル宛書簡では、この八月に軽井沢で宣教師を対象に "Evangelical Buddhism considered in its Relation to Evangelical Christianity" という講演を行なう予定になっていることを報じている。(だが、実際に行なわれた様子はない。)

七月の『聖書之研究』180号には「我が信仰の友」として源信と法然と親鸞の名をあげ、九月の『聖書之研究』182号には「我が信仰の祖先」として、法然(撰撰集)、親鸞(歎異抄)、覚如(安心決定抄)の名をあげている。「信仰の何たる乎かを知りしことに於て彼等は現今の欧米の基督信者よりも遙かに深くあつた、彼等が弥陀に頼りし心は、以て基督者がキリストに頼るべき心の模範となすことが出来る、彼等は絶対的他力を信じた、則ち恩恵の無限の能力を信じた、彼等は全然自己の義 (self-righteousness) を排して弥陀の無限の慈悲に頼つた。」(21・40)(注) 八月の『聖書之研究』181号では、現世を思うこと厚く来世を思うこと薄き「米国流の基督教」より「余輩は寧ろ法然又は親鸞流の

仏教信者たらんと欲す」(21・305)という。内村の共感は、かつてのごとく日蓮よりも浄土門の他力信者の方に寄せられている。この時期、内村の関心がいかに純福音のありかを問うことに向かっていたかが分かる。

だが「十字架教」という言葉が堰を切ったように頻繁に現れるのは、一九二〇(大正九)年以降である。背景にあるのは「再臨運動」(二九二八―二九)の過熱に対する反省であった。一〇月二七日の日記には、

基督教を改称して十字架教と呼びたくなつた、若し基督教の終極が再臨であるならば、其中心は十字架である、而かも単に犠牲の意味に於ての十字架ではない、我が罪が其上に於て取除かれし意味に於ての十字架である、他人は基督教を如何に解しやうとも、余の基督教は十字架教である。(33・307)

その翌々日、一〇月二十九日の日記には、

キリストの十字架が解つて人生のすべての問題が解決せらる、之が解つて縦^た一生が不幸の連続であるとも感謝である、社会問題も労働問題も人種平等問題もあつたものではない、キリストの十字架が解れば人生宇宙悉く感謝である、罪は茲^{こゝ}に消え、希望は茲に輝き、生命は茲に湧く、余の基督教が十字架教と成る時に余は幸福の人と成る。

(33・308)

この年のクリスマス、十二月二十六日の日記には、

終日キリストの十字架に就て考へた、来年は又復元^{はじめ}に還り、特に十字架に就て語り又書く事に決定^また、余の基督教は元々十字架教である、贖罪的十字架教である、余を解せざる者は此教を解しないからである、今日まで余と信仰的友誼を持続せし人々は凡て余と同じく此教を信する者である、余と合ふも離るゝも此教を信する乎否乎に由て定まるのである、余は余の旗幟を闡明にする丈けにても贖罪的十字架教を高唱するの必要がある、況んや之を除いて他に人を救ふの途なきに於てをや、余は余の生涯の最後の努力として、羅馬書、加拉太書、哥林多書等に示されたる十字架教を唱道しやうと思ふ、此事を思ふて余の心は躍る、神は必ず此努力を祝福し給ふであらう。(33)

330)

ここに何回か「日記」を引用したが、内村の日記は「日々の生涯」という表題で彼の『聖書之研究』誌上に公開され、日常の出来事とそれに触れての所感を掲載する公的な性質を持つものであった。

明けて一九二二(大正一〇)年一月一〇日の『聖書之研究』246号には、

福音の中心はキリストの十字架であります、十字架が解らずして基督教は悉皆解りません、十字架は実に基督教の根本義であります、就ては大正十年(一九二二)は主として十字架を説かんと欲します、一月十六日より開始すべき中央講堂に於ては特に十字架教の經典たる羅馬書を講せんと欲します、無益なる思索、病的なる感情を排して、万世の磐なるキリストの十字架を高調せんと欲します、同信諸君の御加禱を願います。(26・55)

という予告が宣言される。そしてこの号の巻頭には「CRUCIFIXIANITY. 十字架教」という英和対照文が載せられる。

基督教は元来十字架の宗教である、是れは単にキリストの教ではない、十字架に釘けられ給ひしキリストの教である、其教ふる所は我等がキリストに倣つて十字架に釘けらるゝ事ではない、キリストが我等の為に十字架に釘けられ給ひし事である、十字架は……基督教の全構造が依て立つ所の隅の首石である、罪は十字架の上に赦され又消滅され、恩恵は十字架の上に成就られし功績を信受する条件の下に約束せられ又施与せらるゝのである、実に十字架なくして基督教はない、(26・4)

しかるに現代では、キリスト教ならざる多くのもの、すなわち社会奉仕や倫理的福音、国際思想までがキリスト教と見做されて通用している。したがって真のキリスト教を新しい名称で呼ぶ必要がある。

余は此欲求に応ぜんが為に十字架教なる名を提供する、而して此名も亦新神学者等に由て濫用され又俗化せらるゝに至らば、余は又更らに新らしき名を鑄造するであらう。(26・4)

予告どおり、ロマ書の講演は一九二二年一月一六日から一九二二年一〇月二二日まで六〇回にわたり、東京・大手町の大日本私立衛生会講堂で行なわれた。聴衆は少ないときで五〇〇人弱(一九二二年四月三日)、多いときは七〇〇

人（五月二日）ほどであった。六百人収容の講堂なので、「聴衆堂に溢れ、空椅子は一脚もなく、起立して聴講する者も尠くなかった」（六月二日）という盛況ぶりである。遠くは栃木県や、わざわざ名古屋から出席する者もあった（九月一八日）。時には神戸、大阪、札幌から来会する者もあった（二〇月九日、一〇月三〇日）。この講演を聴講した鈴木俊郎氏から、「聴衆がどんなに多数であっても、内村先生は自分ひとりに語りかけて下さっているという印象をうけた。水を打ったような静かさで、広い講堂のなか針が一本床に落ちても聞こえるほどであった」という述懐を直接聞いたことがある。このときの講義録『羅馬書の研究』こそ、後に内村の代表作と見なされるものである。内村六十歳にして、氣力の最も充溢している時期である。

先の引用において注目すべきことは、内村が「新神学者」に言及していることである。彼らは「贖罪抜き」の基督教」（26・19）を唱道する者であった。内村は断然これを拒否する。重要なのは、われわれがキリストに倣って十字架に釘けられることではなく、キリストがわれらに代って十字架に釘けられ、罪が赦されることである。「イエスキリストの贖罪に依る救罪」こそ、「基督教の専有的教義」であり、福音の福音たる所以である。（『羅馬書の研究』、26・19）

この年六月、内村は矢内原忠雄の処女作『基督者の信仰』に序文を寄せ、「君の信奉する基督教は近代人の歓迎する所謂基督教に非ず、即ち社会奉仕教に非ず、倫理的福音に非ず、文化運動に非ず、労働運動に非ず、古い古い十字架の贖罪教である、」近代人には時代後れの迷信と見られ、蔑視排斥されるものである、「然るに新人にして俊才の一人なる矢内原君は固く此信仰を取て動かないのである」（26・22）と称え、本書を推賞する。内村が「古い古い十字架の贖罪教」というとき、一九世紀ドイツにおこった自由主義神学が明治二〇年代には「新神学」と称して多くの共鳴者を得ていたことが背景にある。「新」神学と「旧」十字架教が対比されているのである。

一方、十字架は失敗・挫折の結果である。一九二二（大正一一）年六月二四日の日記においては、「十字架は失敗の表号である、基督教は十字架教であつて失敗教（此世に於ては）である、然るを成功を期し、成功を祝し、成功を誇る今日の所謂基督教は偽りの基督教である」（34・56―57）という。「十字架を負ひて我に従へ」とのイエスの言葉は「失敗を期して我に従へ」ということではないのか。「十字架」即「失敗」、内村は、両者を等号で結びつけている。晩年の内村の信仰に或る深々とした陰翳を与え、その人柄に言いしれぬ親しさを感じさせるものは、彼が振返つて自己の生涯は失敗ではなかったか、と思う瞬間も皆無ではなかったことである。

一九二八（昭和三）年六月、受洗五十年を迎えた。一八七八（明治二二）年六月二日、札幌農学校一年生のときに宮部金吾、新渡戸稲造、広井勇などとともにM・C・ハリスよりバプテスマを受けたのである。「信仰五十年」という文章のなかには、次のような記事がある。そのときの受洗者七人のなかで「伝道とか聖書研究とか云ふ坊主臭き職業」に就いているのは自分一人であつて、「私は此事を思ふて度々歎きます。耶蘇教の坊主になりて私は誰にも喜ばれませんでした。政府の人も教会の人も肉身の者も喜んで呉れませんでした。」（31・164）

成績は内村が首席であつた。「試験の成績を見るに殆んど各学科に亘り最高点を取らないものはなかつた程で、恐らく札幌農学校開始以来内村君程最優等の成績を取つた者は他に一人もあるまい」とは宮部金吾の証言である（鈴木俊郎『内村鑑三伝』、187―191ページ）。この有り余る才能を「唯或る何者かに強ひられて斯く成つたのであります。但し私自身としては不幸の生涯を送つたとは思ひません。私は或る隠れたる人達に或る種の慰安を与ふるの器と成つたと思ひます。其喜びに比べて他の喜びは数ふるに足りません。此世の凡ての名譽を取そこなひ、全世界を敵に有つても、一人の小さき者に生命の水一杯を与へ得たと思へば感謝満足此上なしであります。別に五十年祝賀会はありません。

唯当日青山墓地に花を以つて故ハリス君の墓を飾らうと思ひます。」(31・164)

この一九二八(昭和三年)、その死までに一年有半を残すのみとなつた六十八歳の内村には、人生をトータルな形で振り返る気持ちが著しい。四月一四日には横井時雄追悼の演説を行ない、十月四日には広井勇の葬儀で説教を行なう。ともに年来の友人に対する哀惜の念が惻々と伝わる名文であるが、本稿の論旨にとって重要なのは横井時雄への追悼文である。

かつて一八九一(明治二四年)「第一高等中学校不敬事件」で職を追われた内村に、本郷教会の講壇を提供し、収入の途を計ってくれたのは、牧師横井時雄であり、この事件の痛手から世を去つた妻が洗礼を授け、葬儀を司つたのも彼であった。国賊として、国中から札幌の友人からさえも冷たくあしらわれたとき、傷ついた内村の心を温く包んだのが横井であった。横井は『基督教新聞』で、「内村」氏の如く忠君愛国の精神ある人は基督信者中にも多く見ざる処なり」と弁護した。(政池仁「内村鑑三伝」、198ページ)その横井が死んだのである。

横井は同志社社長、衆議院議員を歴任、日糖事件に連座して辞職したとはいえ、その後、ヴェルサイユ講和会議にも出席した人物である。普通、かかる人物を世間は失敗者とはいわないものだが、大阪の或る新聞紙が「横井氏は学者として失敗し、宗教家として失敗し、又政治家として失敗した。氏は何事にも貫徹せずして其の一生を終つた」という記事を載せた。内村はそれを読み、それを踏まえて横井の生涯を追悼する。

横井のこの失敗こそ、まことに彼の人となりを示すものである。正直と愛国と信仰、この三つが彼の特性であり、しかもこの三つが揃つて同時に彼の心に宿っていたから、彼は学者にも宗教家にも政治家にも成りえなかつたのである。横井は信仰のために学者になる野心を放棄し、開成学校を中退して同志社神学校に入った。だが愛国心のゆえに宗教界に留まることができなかった。彼は日本国を、しかも早く、彼の一生のうちに救おうと欲した。信者が内に相

争い、共同一致の見込みもない憐むべき宗教界の現状を目のあたりにしては、伝道をもって日本国を救いうる可能性はない。彼は伝道界を去って政治界に入った。信仰が彼を同志社に追いやったように、愛国心が彼を政治界に追いやった。しかし日本の政治界は泥海であった。キリスト教の信仰によって鋭くされた正直が、泥海にあっても彼を清土のごとく振舞わせた。彼は何事も包み隠さず、他人の罪は、これを自分に担った。これが日糖事件による入獄である。信仰と愛国と正直のゆえに、彼は学界にも宗教界にも政治界にも彼の居場所を得なかった。

だが晩年の二十年は、「内を探り上を仰ぐに至」った。そして彼から洗礼を授けられた人たちが大抵信仰を保ちつづけていることが彼を慰めた。「死に臨んで人を慰むるに足る唯一の事業は伝道であります。軍功も政治も文献も人を死に臨んで慰むるに足りません。唯一つ伝道、一人の靈魂に永遠の生命を供するの機関たりしの自覚、是れのみが臨終の時の慰め又力である事は、多くの人の死方に由て知られます。」(31・160) いわゆる成功を人生最大の目的と見なす者はクリスチャンの、この満足、この喜びを知らない。横井を失敗者と見なした批評家は、横井がその青年時代に、その靈魂の奥に貯えた、この宝に着目しえなかつた者である。

しかし翻って、伝道は成功を期して従事すべきものであろうか。昔の予言者にして成功した人はひとりもなかった。イザヤもエレミヤもホゼアもみなことごとく失敗者であった。「不従順で反抗する民に、終日、手を差し伸べ」(ロマ一〇・21) なければならぬ絶望的生涯である。人のためではなく、神のための伝道、神に余儀なくされての伝道。「人は救はれずとも可い、国は亡びても可い、正義なるが故に唱ふ、神の聖意なるが故に伝ふと云ふ底の伝道でなければ人をも救はず国をも起しません。……眼中人なし唯神あるのみと云ふ質の人のみ真の伝道に従事し得るのであります。」(31・162—163)

そしてイエス自身が決して伝道の成功者ではなかった。イエスはそもそも伝道の初めから、世界獲得のために悪魔

がもちだす条件はすべてにべもなく退けた。だから成功の希望はみずから絶ったのである。「世間的な観点からすれば、伝道のみならず、人生の成功者でもなかった。わずか三十三歳で、最も恥辱的な極刑に処せられたのであった。」
 「此失敗者、其人が我等の救主イエスキリストであります。」(31・163)

成功といい、失敗という。だがこの世での成功に政略はつきものである。だから伝道のような神の事業に当って、「成功」は口に唱えてはならない言葉である。しかるに英米人のキリスト教は「事業宗」(一九三三(大12) 12月12日、日記)であり、英米神学は「成功神学」(一九二九(昭4) 8月11日、日記)である。「近頃仕事が多い為に神を信ずることが少いので困る。少しく油断すると自分も事業宗の米国人に成つて了ふ。事業は実は成つても成らないでも宜しいのである。神の遣はし給へる其独子を信ずる事、其事が信者の唯一の事業であらねばならぬ。事業は之を風に委ね自分はキリストの十字架さへ仰いで居れば可いのである。願ふ今復た此の旧き福音に還らんことを。」(一九二六(大15) 3月20日、日記)

当時内村はつねに「十字架教」を当てはめて人を分類した。ドクトル・マイヤーは七十三年の全生涯を聖書注解の一事に費した大学者であっただけでなく、熱心な「十字架教」の信者であり、またドイツ人として大なる愛国者であった。内村は哲学者カントを連想し、聖書注解のキング(王)であると称賛する(一九二三(大12) 2月19日、日記)。一方、英国国教会の神学者スカートは、その『昇天せるキリスト』を大いに「敬聴」すべき書物であると評価しながら、「十字架教の欠点を指摘する所は気に入らない」という(一九三三(大12) 5月26日、日記)。

一九二九（昭和四）年四月八日、麻布にある日本赤十字病院で精密検査をうけた結果、「心臓に大なる異常のある事を明かに示された。初めて自分の身体の危険状態に在るを知った。何時か一度は受けねばならぬ宣告であつて、敢へて驚くに足らずと雖も、茲に我が生涯の事業を一部廃せねばならぬ時期の到来せしを知りて感謝と共に感慨無量であつた。……今より後、働く生涯を止めて信ずる生涯を送るであらう。最後の数年が最も幸福平安の生涯であるであらう。」だが数年どころか、一年を待たずに彼の生涯は終る、一九三〇（昭和五）年三月二十八日。

このような内村晩年の一九二九（昭和四）年五月、『聖書之研究』346号に「私の基督教」という文章がある。「其十字架の教」のなかには、こうある。

基督教は如何なる教である乎。キリストの十字架の教である。Christianity is Crucifixianity 基督教は十字架と云ひて間違ないのである。キリストが人類の罪を担ひて、然り私の罪を担ひて十字架に釘けられ給ふた。そして私の救はるゝは単に此事を信ずるに因るとの事、其事を教ふるのが基督教である。（32・104）

「其四 信仰に入るの動機」では、人は種々の動機でキリスト教に入ってくる。そのうち最も普通なものは、不幸や困難に遭ひ、慰めを得ようとして入ってくる。第二はキリスト教が一種独特な人生哲学を提供するゆえに、それを獲得し彼らの教養を完成せんとして入ってくる。第三は、自己の利益を離れ、社会事業を目的として入ってくる。しかし、いずれも福音の真髓に入ることはできない。

基・督・教・に・入・る・唯・一・の・正・道・は・罪・の・観・念・で・あ・る・。人が自己の罪に覚め、自己の永遠に罰せらるべき罪人たるに氣附き如何にして其無限の呪咀より脱するを得ん乎と思ひ煩ひて苦悶し、救拯たすけの途を探求めて止まざる時に、神の備へ給ひし其聖子が十字架の上に血を流して遂げ給ひし罪の消滅の福音に接して、之を信じ、之に倚り縋りて唯偏へに天父の恩恵に依り、生命を授けられんことを祈求めて、罪の身其儘を聖前に投出すに至つて、初めて基督教の真理の何たる乎が判明るのである。此途を取りし者に取りては基督教は単に身の慰安でなく、人生哲学でなく、社会事業でない、我が永遠の安危に關はる最重要問題である。そして此問題がキリストの十字架上の死の苦難に由つて完全に解決せられて、彼は他に何物をも要求せざるに至る。即ち彼は自己の罪に追やられてキリストに到り、キリストに由りて神を解するに至つたのである。身の平安を求めてに非ず、宇宙人生の説明を望んでに非ず、此世を善く為さんとの希望に驅られてに非ず、自己の罪に堪へずして、之を取除かれん為に、己れ罪人の首たるに神の子たるの資格を得るの途を求めて、キリストの福音に接して、其深さ、貴さ、有難さが判明つたのである。(32・112—113)

内村が生涯にわたる著作活動の舞台となつた『聖書之研究』誌終刊号、第三五七号は、内村の死後、一九三〇(昭和五年)四月二十五日、その遺稿を集めて刊行された。彼が亡くなつたのは三月二十八日だから、三月一〇日に刊行された第三五六号が、彼の存命中に発表された最終号ということになる。さすがに病い篤く、そこには前年の十二月十二日、聖書研究会において鈴木虎秋が代読した原稿「コンボルシヨンの実験」という論文と、「新旧の別」という短い所感が載っているだけである。だから「コンボルシヨンの実験」は、内村の生前に活字になつた最後の論文といふことができる。

コンボルシヨンという発音は奇異に感じらるれが conversion のことである。(同誌一月号の「神に帰るの経験な

き者の基督教〔32・263—264〕で確認できる。〕この語を「改悔」と訳しても、仏教語を借りて「発心」という言葉を当てはめても、conversionの真義は表わしがたいから英語そのままを用いるという。それは「廻る」が原義で、廻転方向転換を意味する。北へ向って進んでいた者が廻転して南へ向って進むことであり、滅亡へ向って進んでいた者が廻転して救拯へ向って進むことである。決定的な廻転であり、しかも大抵の場合は急激な廻転である、かの放蕩児の帰還のごとく。各自、靈の奥深いところで実験するほかは知りえないものである。「コンボルシオンは人に靈的造化が行はるゝ事である。〔32・313〕実験第一の結果は、人は生まれながらの罪人であることを知ることである。理由も原因も分からないが、「己が罪人たる事が明白になつて、正義の神の光に堪え得ざるに至る。〔32・314〕ロマ書七章全部が、パウロの経験を語っている。罪の自覚とその結果たる死の苦痛である。」

実験の第二は、「キリストの十字架の承認である。罪を自覚し、之に追詰められ、推諉るべき途なき時に、十字架を示されて、その罪人の唯一の隠場なるを承認せしめらる。茲に初めて罪の重荷を下し、赦されし者の歡喜に入る。」〔32・315〕

キリストの十字架は義なる神が義に由りて不義の人を義とし給ふ驚くべき途である。……キリストの十字架が解つて人は是れ以外に何の求むる所なきに至る。……信者の生涯は主として十字架を仰ぎ瞻るの生涯となるのである。何事に就ても十字架である。再び罪を犯す時も、罪の身に神の恩恵を仰ぐ時も、復活永生の福祉を我有として要求する時も、凡て十字架に因るのである。十字架、十字架、何を措いても十字架、基督教は詰まる所十字架教である。自分がキリストに倣ひて十字架を負ふ事でない、キリストが自分に代りて担ひ給ひし十字架を信仰を以つて仰ぎ瞻て、其功績に因りて神の凡ての恩恵に与ることである。コンボルシオンの中心はキリストの十字架の發見である。

之に由つて人は其生命全部を一変するのである。そして此大変化が十字架の一瞥に由りて行はるのである。
(32・315—316)

『聖書之研究』終刊号の、内村の手になる文章の最終ページは、「善悪共に善し」と題する断片録で、「善い事は勿論善い事、悪い事も亦善い事、神を信ずる者に取りては事として善からざるはなし。……それは其善である。宇宙人生、善なる神の御働きに外ならない。……失敗、疾病、死其物も神の御目にはすべて善い事である。そして信仰は自己を神の立場に置くことであれば此立場に立ちて見て物として善からざるはなしである」(32・316)という言葉で終っている。

一九三〇(昭和五)年三月二八日、内村は満六九歳の生涯を閉じる。三月二九日の新聞は各紙一斉(東京朝日、万朝報、東京日々、時事新報、国民新聞、読売、The Japan Times)に葬儀は三十日午前十時から、告別式は午後一時から午後三時まで柏木の自宅で行なわれると報じている。葬儀の式次第や当日の様子は、石原兵永『身近に接した内村鑑三(下)』や、鈴木範久『内村鑑三日録12 万物の復興』に詳しいから繰返すことはしない。私がここで指摘したいことは次の二つである。

第一は、この日の葬儀で一番重要な役目を担った藤井武の弔辞である。彼は「私の親たる内村先生」という表題を掲げて、弔辞を述べた。内村は死の二日前、師の病いの平癒を祈り古稀の誕生日を祝う弟子たちの集りに「人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る」というメッセージを寄せた。藤井は、「宇宙の完成!……未だ曾て宇宙のた

めに祈つて死んだ人のある事を聞きません。……噫、われらの先生は万物復興の大きな夢を見ながら眠りました。これは何者の最期でありませうか。これこそは実に偉大な預言者の最期ではありません乎」という言葉で始め、この預言者の告別式は「むしろ新日本の定礎式」であり、「希望と祝福とに満たされたる国民的大典」であり、「光は洋々として四方から私どもを囲んでゐます」という言葉で結んでゐる。この高揚した調子の弔辞の中段に、個人的具体的な回想を踏まえて、十字架にすぎない内村の姿が描かれる。

先生はよく言はれました。……私は罪人である。それゆゑに私はキリストの十字架に頼るのである。十字架の血によつて罪を赦していただき、さうして初めて私は生きることができるのである。十字架に釘けられたキリストを仰ぎ見る事よりほかに私の生命はないのである云々と。

(中略)

考へて見ますと、私どもは最初から十字架の木の下に先生を発見したのであります。先生はその信仰生活の前途かきとからして、しっかりとこの木を握つてゐました。さうして爾来五十年間一日もこれを放すことをしませんでした。先生は十字架をかざして現はれ、十字架にたよつて戦ひ、十字架にすがつて去りました。十字架を離れて内村先生、なしであります。先生を十字架から引離して考へるほど無意義な事はありません。

『藤井武全集第十巻』、111—118 ページ

藤井は、内村がその信仰生活の最初から、爾来五〇年間一日も十字架を放すことはなかった、という。しかし「十字架教」という新語を鑄造したのは一九一五(大正四)年のことである。それを力説強調したのは、ここ十五年のこ

とである。しかもそれに弾みをつけたのは誰であろう藤井武、彼の論文「単純なる福音」であった。藤井はキリスト福音の伝道者として立つという長年の夢がかない、一九一五年の年末エリートコースであった内務官僚の職を辞し、内村の助手として『聖書之研究』誌に寄稿することとなった。その第二作が『単純なる福音』で、一九一六（大正五）年三月『聖書之研究』188号に載った。だがこれは贖罪に関し、内村の信仰と相容れず、以後、藤井は論文の寄稿を差し止められてしまった。そして内村は直ちに翌四月号（189号）に「神の忿怒と贖罪」を発表し、彼の立場を闡明にした。そしてこの立場は最後まで一貫して、亡くなる二〇日ほど前の三月九日、今井館において、もはや講壇に立つことができなくなった内村は、鈴木虎秋に、この旧稿を代読させた。十字架の贖罪を強調する「十字架教」を唱えさせた直接のきっかけは、内村の葬儀で、多くの弟子のなかから唯一人選ばれて弔辞を読んだ一番弟子の藤井武であったのである。

第二は次のエピソードである。

式後応接間で新渡戸博士が藤井武氏にむかって言われたとの事である。「近い弟子たちはあまりに先生の暗い方面、十字架などにばかり偏している。先生にはもっと明るいトライアムファント (triumphant 勝利的) の方面が多くあったと思う、云々」と。また葬儀もこんなせまい場所ではなく、世界的偉人の告別にふさわしく市内で盛大に行なうのが望ましかった、とも言われたという。博士の言われる所も理解できないではない。しかし藤井氏は友人に告げて言われた。「これはたぶん、内村先生に対する新渡戸博士自身の不満でしょう」と。

『身近に接した内村鑑三(下)』303ページ

葬儀の行なわれた今井館聖書講堂は自宅に隣接した小規模な集会場であった。しかるに会葬者は千余人を数えた。かつて内村が、「事業」「成功」の路線に「十字架」「失敗」の路線を対置させたことを想いおこせば、きっと内村はにっこり笑って、旧友新渡戸の好意に感謝し、若い弟子たちの熱誠に期待したことであろう。

(注) 引用のあとの括弧内の数字は、定本とされる岩波版『内村鑑三全集』(一九八〇—八四) 21巻40ページを指す。以下、同じ。また、引用文中の傍点は、すべて内村自身のものである。